

なつやなぎ／夏、柳は青々と葉を濃くし、地面や川面に長く枝垂れ、ときに細い枝を風になびかせる。枝垂れて川面を水鏡とする風情は趣深い。

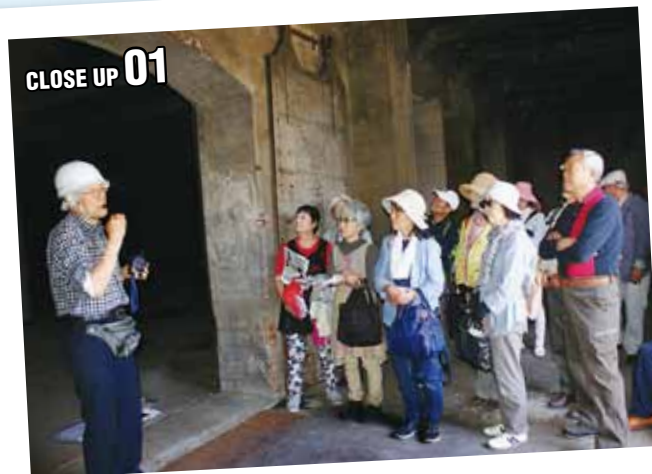
らしく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

歴史ある建物、 まち並みを守り伝える

CLOSE UP 01



旧被服支廠の保全を願う懇談会
貴重な被爆建物を保全し守る 世界で初めて
原爆が投下された惨状と記憶を後世に伝える

CLOSE UP 02



草津まちづくりの会
1,000年以上もの歴史、文化を活かした
まちづくり

CLOSE UP 03



湯ノ山旧湯治場利活用検討委員会
江戸時代に栄えた由緒ある湯治場を守り、
地域活性化を図る



貴重な被爆建物を保全し守る 世界で初めて原爆が投下された惨状と 記憶を後世に伝える

修学旅行生を対象にした平和学習、被爆証言を聞く会の様子

CLOSE
UP

歴史ある建物、まち並みを守り伝える

広島には歴史ある建物やまち並みが多くあります。保全活動や地域活性化に取り組んでいる団体を紹介します。

旧被服支廠の保全を願う懇談会

<http://hifukushisho.jp/>

昭和20年8月6日の被爆の爪痕を残す建物

広島市南区出汐に、広島県立広島工業高等学校と広島県立広島皆実高校に隣接する形で今も残る、赤レンガ造りの旧陸軍被服支廠の建物。被服支廠とは、軍服や軍靴を中心に、軍事関係の衣服や雑貨類を製造していた工場で、広島の被服支廠は、明治38年に洗濯工場として建築され、後には全国で3番目の規模の被服支廠として、その役割を果たしていました。最大で13棟あった倉庫の内、現在はL字形に4棟の建物が現存し、そのいずれもが大正2年に鉄筋・レンガ造りで竣工されました。

昭和20年8月6日の被爆直後は、臨時救護所としても使われた建物は、峠三吉の詩にも描かれています。その貴重な被爆建物の保全を願って、当時被服支廠で働いていた中西巖さんを代表に、平成26年3月に発足したのが「旧被服支廠の保全を願う懇談会」です。

「平成21年に行われた、ピースボート「ヒパクシャ地球一周証言の航海」に被爆証言者のひとりとして参加した時に、現在、団体

の役員を務める内藤達郎さんと出会いました。当時は船を降りたら、被爆証言者としての役割を終えようと考えていましたが、学徒動員として15歳の時に被服支廠で働いていたことや、そこでの被爆体験を内藤さんに話すうちに、残っている建物をなんとか残し伝えたい、とあらためて思うようになりました」と中西さんは発足のきっかけを語ります。



▲ 役員の皆さん。左から辻靖司さん、多賀俊介さん、菊楽忍さん、代表の中西巖さん、内藤達郎さん、天崎俊章さん



▲ 旧陸軍被服支廠の外観

被爆建物「旧陸軍被服支廠」を 正確に情報発信し、知ってもらうことから

現在は、6人の役員を中心に約200人のメンバーがいます。「一番の課題は、旧陸軍被服支廠の建物の存在を知ってもらうことです。県外の人はもちろん広島県在住の人、あの建物が何か、知らない人が多いです。その人たちに向けて、正確な情報発信をすることが大切だと考えています」と菊楽忍さん。

1棟の全長は約500メートル近くあり、その大きさはレンガ造りの建物としては国内最大級とも言われ、戦後は、広島大学の学生寮や県立広島工業高等学校の校舎、さらには民間企業の倉庫としても使われていましたが、平成7年以降は使用されていません。

「平成20年頃、私は被爆証言者のひとりとして広島平和記念公園を訪れる際、必ず建物の横を通っていました。その時、あの場所で一緒に働いていた仲間の事や、被爆直後に助けを求めて来た人たちの事を思い出しました。また建物から、“助けてくれ”と言った声が聞こえてくるような気持ちを抱き、その思いは日に日に高ぶってくるような気がしてならなかったんです。声なき証言者である被爆建物を何とかしたい、その大切さを伝えないといけない、そんな思いを持って当時も今も活動しています」。

活動は、現地見学を希望する団体の窓口として、建物を管理する広島県と調整をする他、修学旅行生を対象に現地で被爆証言を聞く会などを行っています。平成29年度は見学者が初めて1,000人を超え、その役割はますます大きくなっています。また、発足5年を迎える平成31年春には、旧陸軍被服支廠で働いていた人の証言をまとめた記念証言集の発行も計画中です。「当時、大人から学徒動員の学生を含め最大で1,500人近くが働いていたと記録が残る中、私の同級生で今も生きているのは10人ほどです。被爆直後は、臨時救護所として多くの人があの場所で亡くなりましたが、その正確な数すら分かりません。保全のためにクリアしないといけない条件は高く、難しい面もあります。しかし、まずは多くの人たちに建物の存在を正確に知ってもらい、その大切さを理解してもらう事に取り組んでいきたいと思っています」。被爆者が高齢化する中、被爆建物の役割は年々高まっています。限られた事しかできないもどかしさもある中、皆さんが続ける被爆建物の保全活動に、大きな意義と熱意を感じました。

自分らしく、
暮らそう

Vol.51
夏柳号
2018.7

contents

特集

01 歴史ある建物、まち並みを守り伝える

▶ 旧被服支廠の保全を願う懇談会



被爆建物見学会の様子

▶ 草津まちづくりの会



草津のまちを
ガイドする様子

▶ 湯ノ山旧湯治場利活用検討委員会



湯ノ山明神旧湯治場の
拝殿

05 らしくくレポート ひろ記者が行く

▶ 建築は語る 広島の魅力と復興の歴史を

らしくくコラム

▶ まずは素敵なネーミングから始めましょう！
近畿大学 工学部 建築学科
谷川 大輔 准教授

06 ようこそ！公民館へ

▶ 佐伯区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

▶ 永岡 紘一さん
▶ 部屋 拓三さん

09 Hm助成支援団体のご紹介

▶ 比治山の森を守り育てる会
▶ 子育て・親育ち

11 情報の森

15 プラザ通信

1,000年以上もの歴史、文化を活かしたまちづくり

草津まちづくりの会

江戸時代のような風情が残るまち草津

1,000年以上もの昔から、漁業や海運のまちとして賑わっていた広島市西区草津。まちの中を、西国街道さいごくかいどが通って、江戸時代には広島城下と廿日市宿との中継地「間宿」としても栄えていました。そして今もお、その当時の面影が、街道と路地に数多く残るこの草津地区。平成10年8月に「草津まちづくりの会」は発足しました。

「全国的にも有名だった幕末からの老舗「大石餅店」が解体されることを知った建築家が、地域の有志に呼び掛け、店で最後の餅つきを開催。それをきっかけにして、歴史と文化資産を活かしたまちづくりに関心がある人たちが集まりました」と語るのは、現在、代表代行者を務める縄岡忠則さんなわおかただのり。

街道から葉脈のように延びる路地に入ると、何度も訪れたことがある人でも、うっかりすると迷ってしまうような複雑な入り組みがある

のが特長。その周囲をよく見てみると、左官の技と心意気を示す鍔絵つてえのある蔵や、船板壁や袖うだつのある古い家など、まるで江戸時代にタイムスリップしたような気分に入ることができます。

草津を訪れてもらうさまざまな取り組み

そんな古き良きまち草津を多くの人に知ってもらうために、これまでさまざまなイベントを実施。定期的に実施しているのは「草津歴

史の散歩道ガイド」。毎回テーマを決めて会員がガイドとなりミニ講座を開き、その後約2時間歩いて草津のまちの歴史を探訪しています。

また草津は港町としても栄え、古くは蒲鉾店が数多く軒を連ね、かき養殖も盛んで、大阪に向けたかき船が評判を得て、広島のかきを有名にしました。今でも営業を続けている蒲鉾店で作った練り物や、かきなどの魚介類を堪能できる「草津うまいもん市場」を毎年3月の第2日曜日に開催。また、毎年9月の第1土曜日と日曜日には、まち全体をミュージアムに見立てたイベント「草津まちオープンミュージアム」を開催しています。

平成15年には、現存する最大限の資料をデジタル化して記録。草津公民館内にパソコンを設置し、町民共有設備として小さな博物館「1,000年歴史草津まちIT博物館」を立ち上げ、誰でも自由に資料を閲覧できる取り組みも行っています。

現在は40人ほどの会員が在籍。いわれのある社寺や、町屋の風情を残す草津のまち並みに、懐かしさを求めて訪れる人たちの大きな力となっています。

「草津は、幸いにも原爆の直接的な被害を免れて、古いまち並みが残って、どこよりも庶民の暮らしを感じることができます。しかし、古い町屋にも寿命はあり、その保存をどうしていくのか。考えて、実行していく時間は限られています。可能な限り後世に残していくためにも、多くの人に訪れてもらい、まちの魅力を知ってもらうことが、まずその第一歩だと考えています」と縄岡さん。地域の皆さんの、わがまち草津に対する強い愛情を感じました。



▲ 代表代行者の縄岡忠則さん



▲ 今も趣ある路地には、遠見遮断（ジグザグ路）などが残る



▲ 舟板堀



▲ 江戸時代に創業し今も宮島の御神酒を造っている小泉家



▲ 今も草津に残る鍔絵

江戸時代に栄えた由緒ある湯治場を守り、地域活性化を図る

湯ノ山旧湯治場利活用検討委員会

藩主も癒された湯治場は国の重要有形民俗文化財

広島市佐伯区湯来町にある湯ノ山地区は、古くから鉱泉が湧き出て、寛延元年（1748）に当時の広島藩主・浅野吉長あさのよしながによって、湯治場に指定されました。それから270年余り、長い歴史を持つ由緒ある湯治場を起爆剤に、地域の活性化を図る目的で平成25年に結成されたのが「湯ノ山旧湯治場利活用検討委員会」です。

「私たちが子どもの頃から親しんできた湯ノ山明神旧湯治場は、昭和49年に国の重要有形民俗文化財に指定されました。指定当時の保存修理から30年以上が経ち、いろんな箇所の破損や腐朽が著しくなって、ふたたび保存修理の必要性を感じていたんです。修復をすることで、もっと湯ノ山温泉を訪れる人を増やして、地域活性化ができればと思いました」。会長の西尾保幸にし おやすゆきさんは語ります。

湯ノ山旧湯治場には、湯屋の上段に本殿、拝殿などの神社施設があり、訪れた人は、拝殿にお参りして祈願。そこから、湯ノ山旧湯治場の湯屋を眺めることができます。また、通常一般には公開されていませんが、岩崖を掘りくぼめた素朴な湯壺を持つ湯屋の建物の板壁には、昔の湯治者が書いた句など墨書きが、今も残されて古の趣を感じることができるとか。この度の保存修理



▲ 大正時代の湯ノ山明神旧湯治場のうたせ湯（源泉浴場）の様子



▲ 大正時代の湯ノ山明神旧湯治場の湯屋の様子

は、湯屋を中心に4年に渡って行われ、平成29年に終了。同年9月には、湯屋の内部も特別に公開された「湯の山温泉湯治場まつり」が開催され、地域住民はもちろん、多くの人で賑わったそうです。



▲ 森井和也さん(左)と会長の西尾保幸さん(右)

地域一体となり、故郷の財産を守る

「昔から地域の住民にとってこの湯治場は、畑仕事が終わってくつろぐ場所でした。旧来の湯治場の姿と、医療とそれにまつわる信仰の様相を伝えるものとして価値が評価され、国の重要有形民俗文化財に指定された後の昭和50年代には、7～8軒の旅館が連なる温泉地として栄え、週末には湯治客で賑わっていました」と西尾さんは、当時をこう振り返ります。

その後、時代の変化とともに地域の状況も様変わりし、現在は1軒の旅館と、2つの温泉施設のみが営業。「時代が変わっても湯ノ山地区には、霊泉のうたせ湯での足腰の治療をはじめ、健康維持を兼ねて年間約10万人が訪れています。こうした歴史ある湯治場を知ってもらう事が、地域の活性化の第一歩に繋がると考えています」。会員で旅館を営む森井和也もりい かずやさんは、地域をいかに活性化させるべきかを考えています。

現在、藩主も癒した湯ノ山明神旧湯治場の湯は、湯屋の下にある「湯の山温泉館」の打たせ湯で楽しむことができます。今後は、案内板の整備の他にも地域一体となったお祭りなどで、訪れる人を増やす取り組みをしたいそうです。

「地域に古くから伝わる物を捨てることはできません。守り伝えるためにも、地域のつながりを大切にし、ひとつずつでもできることから活動していきたいですね」と西尾さん、森井さんは話してくれました。故郷に残る文化資産を大切に自分たちで守ろうとする、皆さんの強い志を感じました。



▲ 湯ノ山明神旧湯治場の湯屋